



Title	鷗外訳「新浦島」に見られる翻訳技法（2）：過去形の羅列を避ける技
Author(s)	中, 直一
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2015, 2014, p. 17-26
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/54549
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

鷗外訳「新浦島」に見られる翻訳技法（2）

— 過去形の羅列を避ける技法 —

中 直一

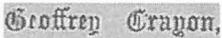
1 はじめに

鷗外訳「新浦島」には、底本のドイツ語文で「彼は～した」と表現されている文章を、敢えて「～したのは彼です」という風に、一種の強調構文のように変形した訳文が登場する。底本で「彼は～した」となっている文章は——初学者風に訳すなら——、当然のように訳文でも「彼は～した」となるところであろう。実際、鷗外も「新浦島」の中の多くの訳文において、「彼は～した」というタイプの訳文を示している。全ての文章において、鷗外が強調構文風の訳文を提示しているわけではなく、所々において、「～したのは彼です」というような強調構文風の訳文を見せている。鷗外はなぜ、そのような変形作業を行ったのであろうか。このような強調構文風の訳文は、どのような効果を読者に与えるのであろうか。

以下本論文において、鷗外の「～したのは彼です」式の訳文にどのような種類があるのか——実はかなりのバリエーションがある——を紹介し、その技法の根底にある鷗外の意図を探ってゆく。

なお本論文においては、本研究プロジェクト前号で発表した拙論において使用した翻訳底本や鷗外訳を使用するので、書誌的な情報や本論文で使用する略号、ルビ、アンダーライなどについての説明は前号の記載をご参照いただければ幸いである¹。ただし、アーヴィングの英語原文については、前号執筆以後、鷗外文庫に所蔵される鷗外旧蔵書(Irving, Washington. *The sketch-book of Geoffrey Crayon, gent.* Cassel & Company, Limited: London, Paris & Melbourne. Z.P. Maruya & Co., Tokio. n.d.)のコピーを入手し得たので、本論文においてアーヴィングの英語原文を引用する際は上掲書のページを示すこととする。

なお上掲前号拙論脚註6において筆者は鷗外文庫所蔵の鷗外旧蔵書名を Irving, Washington. *The sketch-book of Geoffrey Grayon, gent. Lond., &c., Cassel & Tokio, Maruya, n.d.*”と記したが、これは鷗外文庫洋書目録(*Der Autor-Katalog von ausländischen Bücher in der Bibliothek des Drs. Rintaro Mori*, S.63)の記載をそのまま転記したものであった。実はこの洋書目録自体にタイプミスがあり、本来 Crayon と綴られるべきところが Grayon となっていたことが今回判明した。念のために、鷗外文庫の現物と洋書目録の画像データを示しておく。

鷗外文庫の現物	
洋書目録の記載	Geoffrey Grayon

¹ 鷗外訳「新浦島」に見られる翻訳技法(1) — 底本の語順をどう邦訳に生かすか — (大阪大学大学院言語文化研究科『言語文化共同研究プロジェクト 2013 言語文化の比較と交流 1』) 2014 年。

このように、鷗外文庫現物の亀の甲文字の“C”を、洋書目録の編者が“G”と読み誤ったことが分かる。

2 主語を強調構文に変換する技法

まず始めに、最も典型的な例を挙げる。自分のことは何もしないが、他人のためにならどんな労苦も厭わない主人公リップの性格を描写した部分である。

〔参考〕 He would never refuse to assist a neighbour, even in the roughest toil, and was a foremost man at all country frolics for husking Indian corn or building stone fences; (pp.34-5)

〔底本〕 Er würde sich niemals geweigert haben, einem Nachbarn selbst in der härtesten Arbeit beizustehen, und er war stets der Erste bei allen ländlichen Festlichkeiten, wo es Welschkorn auszuhülsen oder steinerne Schutzmauern zu bauen galt. (S. 59)

〔鷗外訳〕 隣の人の業になら、どんな六つかしいことにでも、手を借すのは、此人です。祭の時に蜀黍モロコシの莢を剥ぎ、石垣を築くとき、第一に力を出すのは、此人です。(p. 169)

底本のドイツ語を現代語訳するなら、「彼は極めて困難な仕事でも隣人に手を貸すことを拒まなかったものだ。そして、トウモロコシの皮をむいたり、石垣をこしらえることが必要となるような地域の祭りでは、どんな祭でも、彼は常に最初にそれを為す人なのだった」ということになる。この拙訳を、仮に鷗外の訳語を使用しつつ、架空の鷗外風訳文に変形するならば、たとえば「此人は、隣の人の業になら、どんな六つかしいことにでも手を借すのでした。祭の時に蜀黍の莢を剥ぎ、石垣を築くとき、第一に力を出しました」というような形が想像されるところである。

そこを鷗外は敢えて、「此人」を冒頭に出さずに、「……するのは此人です」というように、強調構文のような訳文にしたのである。筆者が鷗外のこのような訳しぶりを最初に見たとき、なぜこのような強調構文風の訳文にするのか、その真意が掴みきれなかった。「Aは～した」と訳しても十分であるところを、敢えて「～したのはAです」というように変形する理由が把握し難かったのである。

当初の筆者の考察では、鷗外の訳文は強調構文であり、かつ「体言重視構文」とも名付け得るのではないかと考えた。底本の冒頭にある主語（体言）を、訳文では文末に置くということは、動詞より体言を重視することになるということに他ならない、と思えたわけである。

だがこのような例にいくつか接する内に、鷗外の真意が体言の重視というより、むしろ、訳文における過去形の羅列を避ける、ということにあるのではないかと気付くに至った。以下、順次この観点から考察を進めてゆく。

強調構文的訳文は、次の例でも見られる。主人公リップが二十年の（そしてリップ自身にとっては一晩の）眠りから覚めて、周囲の景色を見回す場面である。

〔参考〕 The birds were hopping and twittering among the bushes, and the eagle was wheeling aloft, and breasting the pure mountain breeze. (p.41)

〔底本〕 Die Vögel hüpfen und zwitscherten im Gebüsch, und der Aar kreiste hoch in der Luft und trotzte dem reinen Bergwinde. (S. 67)

〔鷗外訳〕木の間には枝から枝に渡つて鳴く小鳥、清い山風に抗つて高く舞ふ青空の鷺ばかり。(p. 176)

底本では Vögel (鳥) と Aar (鷺) はいずれも主語だが、鷗外はそれを訳文において文章末に配置している。底本のドイツ語を普通に訳すと「鳥たちは繁みを跳びはねてさえずり、そして鷺は空高く弧を描いて、爽やかな山風にあらがっていた」となる。つまり底本では、「Aは～していた」という形の構文が二回繰り返されるのであるが、鷗外はそのいずれも「～する A (ばかり)」という構文に変形して訳している。

鷗外のこの訳文のすこし前の文章から上記のところまでを、煩を厭わず引用すると、「目が覚めて視れば、また原の緑の岡の上に居ました、丁度あの異しい桶を擔うた男を始めて見た所に。目を摩つて見れば、夜は明け離れて、旭が麗かに照つて居ます。木の間には枝から枝に渡つて鳴く小鳥、清い山風に抗つて高く舞ふ青空の鷺ばかり」となっている。ちなみにこの部分の現代語訳を見ると「目をさますと、あの老人が溪谷を登って来る姿を初めて見た緑の丘にいたのだ。眼をこすってよく見ると、陽の輝いている朝であった。小鳥が、繁みのなかをとび歩きながら、さえずっている。鷺が、澄んだ山の微風を胸で切つて、空高く輪を描いて飛んでいた²」となっている。この訳自体、英文で“The birds were hopping and twittering ...”と過去進行形を使用している箇所を、「とび歩きながら、さえずっている」というように現在形を使用しており、過去形の羅列を避ける配慮が行われているのだが、鷗外の訳文は、そうした配慮をもっと大々的に行っていると言えよう。すなわち初学者風に訳した場合に「彼は……丘の上にいた」「彼は目をこすった」「朝だった」「鳥が飛び跳ねてさえずっていた」「鷺が弧を描いて、風にあらがっていた」というように過去形が続く訳文が想定されるが、鷗外はその様な過去形の羅列を避け、強調構文風に変形した訳文を採用することによって、過去形と現在形をミックスした文章を読者に提供したと考えられるのである。

次に見るのも、やはり底本の主語を、鷗外が強調構文風に訳出している例である。場面は、浦島太郎状態のリップが二十年後の村に現れトンチンカンなことを喋っている所に、村の古老が近づいて来る、というシーンである。

〔参考〕 ... when a knowing, self-important old gentleman, in a sharp cocked hat, made his way through the crowd, putting them to the right and left with his elbows as he passed, ... (p. 45)

〔底本〕 Da bahnte sich ein hochweiser, wichtig thuender alter Herr mit spitzem gekrämpftem Hute seinen Weg durch die Menge, indem er sie im Vorbeigehen nach rechts und links mit seinen Ellenbogen auseinanderstieß. (S. 72)

〔鷗外訳〕この時に又た群衆を肘で撞き退け撞き退け³、リップの面前へ出て来たのは、仔細らしい、物識り顔な老人で、…… (pp. 180-1)

底本の骨格部分は、“... bahnte sich ein ... alter Herr ... seinen Weg ...”であり「老紳士が……やってきた」と

² 齊藤光訳「リップ・ヴァン・ウインクル」(安野光雅他編『怠けものの話』筑摩書房 1989年) p.122

³ 底本では二回目の「撞き退け」は繰り返し記号(所謂「くの字点」)を用いた表記になっているが、本稿ではワープロ機能の制約があるため、繰り返し記号が使用出来ず、やむをえず同じ文字を繰り返して記載した。

いう意味であるが、それを鴟外は「群衆を……撞き退け撞き退け……出て来たのは……老人で」と訳したのであるから、底本の主語を強調した訳文に変換したものであることがわかる。

ここでも鴟外は、底本の主語 *ein alter ... Herr* (老人) を、訳文では後ろの方に配することにより、訳文全体を過去形で終わらせないという文体上の工夫を見せていると考え得る。

3 時間表現の強調構文に変換する技法

前節で見たように、鴟外は底本で「Aは～した」となっている文章を、訳文において「～したのはAです」という風に、主語を強調構文に変換する技法を見せていたが、もうひとつ、時間表現を強調構文風に変換する技法も見せている。

次に紹介するのはその典型で、リップが謎の老人に出会う少し前の場面である。

[参考] *Panting and fatigued, he threw himself, late in the afternoon, on a green knoll, covered with mountain herbage, that crowned the brow of a precipice. (p.38)*

[底本] *Keuchend und ermattet warf er sich spät am Nachmittage auf einen grünen, mit Gebirgskräutern bewachsenen Hügel, der den Rand eines Abhanges krönte. (S. 63f.)*

[鴟外訳] 渠が疲れ果て、喘ぎつゝ、崖の縁を冠の様に飾つて居る、山苔で裏まれた^{ツツ}緑の丘の上に倒れたのは、晝過ぎ遅くでした。(p. 173)

上に示した例では、時を表す副詞的表現を鴟外は強調構文風に訳している。すなわち「Aの時に～した」という底本の構造を「～したのはAの時です」と訳しているわけである。仮に鴟外がこのような強調構文風の訳文を採用せずに、底本の構造に近い訳文を構成したと仮定すると「晝過ぎ遅く、渠は疲れ果て、喘ぎつゝ、崖の縁を冠の様に飾つて居る、山苔で裏まれた^{ツツ}緑の丘の上に倒れました」というような訳文が考えられる。これでも十分に意味は通じるが、文章を過去形で終えることになる。それより時間表現を強調構文風に変更すれば、文章を現在形で終えることが出来る。鴟外はそのことによって訳文に過去形が羅列されることを避けたのではないかと思われる。

次に示す例は、底本では現在形であるが、日本語に訳す際には過去形に訳さざるを得ない文章における、時間表現の強調構文文化である。

[参考] “*Nicholas Vedder! why, he is dead and gone these eighteen years! ...*” (p. 46)

[底本] “*Nikolaus Vedder? Ei, der ist bereits seit achtzehn Jahren todt und dahin! ...*”, (S. 73)

[鴟外訳] 「なに、ニコラス、ベツタア。あの男が死んだのは、もう十八年前の事だ。……」 (p. 181)

これも「訳文における過去形の連続を避ける技法」の一つであると見なしうる。確かに底本のドイツ文は現在形であるが、仮にこれを日本語でも現在形に訳すと「あの男はもう十八年前から死んでいる」という、非常に収まりの悪い日本語にならざるを得ない。つまり底本のドイツ文は、普通に訳すと「あの男はもう十八年前に死んだ」という風に、日本語では過去形に訳さざるを得ないのである。

この会話文は、主人公リップが二十年ぶりに（そして本人にとっては一晩の眠りから覚めて）故郷に

帰ってきて、村人とトンチンカンな会話を繰り返す場面である。この場面でリップは、旧知の友人の名前を挙げるが、その名前を聞いて村人が答える、その発言の部分である。鷗外訳ではこの会話文の前で、「群衆は暫く静まつて居たが、中で老人が一人、薄い悲し氣な聲で答へました」(S.181)という訳を与えているが、ここは訳文において過去形が使用されている。これに続くのが上記の引用文であるが、鷗外は恐らく地の文と会話文において、引き続いて過去形が続くのを避け、会話文に現在形を使用して、訳文全体にメリハリをつけたのではないかと思われるのである。

4 主語の強調構文の変形——複雑な変形技法

前節および前々節において、主語に関する強調構文変換および時間表現に関する強調構文変換の例を見てきたが、鷗外は単に「Aは～した」を「～したのはAです」に変換するという技法だけでなく、それを複雑化した訳出ぶりをも見せている。

まず最初に紹介するのは、強調構文と「zu+不定詞」のパラフレーズとが複合した例であり、しかも、前者すなわち強調構文のパターンが、底本で「AすなわちBは～した」となっている箇所を、鷗外が「Aは～するようなBです」という風に、それ自体が基本パターンをさらに変形した形になっている例である。

[参考] His son Rip, an urchin begotten in his own likeness, promised to inherit the habits with the old clothes of his father. (p.35)

[底本] Sein Sohn Rip, ein kleiner, ihm sprechend ähnlicher Knirps, verhiess mit den alten Kleidern seines Vaters auch dessen Gewohnheiten zu erben. (S. 60)

[鷗外訳] 父にそつくりなりリップといふ息子は、唯だ^{カタチバカリ}貌計でなく、心まで父に似やうといふ、頼もしい望のある小僧です。(p.170)

ここには二つの技法が込められている。ひとつは、再三述べてきた「体言を末尾に置く強調構文的文体」である。もう一つは「zu +不定形」をパラフレーズして訳す、という技法である。

まず強調構文文化の技法であるが、これは今まで見てきたような「主語+動詞過去形」(Aが～した)を、翻訳において強調構文的に訳す(～したのはAです)という翻訳技法を用いつつ、これをさらに変形したものと考えられる。

底本の文章構造を生かすように訳すならば「彼の息子リップは、文字通り父親とそつくりな男であったが、父の古い衣装とともに、またその習性をも受け継ぐことが予示されていた」となろう。このうち主語に眼を向けると、底本においては、Sein Sohn Rip(彼の息子リップ)と ein kleiner, ihm sprechend ähnlicher Knirps(小さな、彼に文字通り似ている男)という、同格の二つの名詞が主語になっている。つまり底本の文章構造をパターン化して示せば「AすなわちBは～した」という形になっている。

鷗外は、上記の主語の部分を中心に複雑に分解の上、これを再構成して訳している。まず Sein Sohn Rip(彼の息子リップ)であるが、これを鷗外は「リップといふ息子」と訳していて、特に何か指摘することもない、普通の訳し方である。問題は次の同格主語 ein kleiner, ihm sprechend ähnlicher Knirps(小さな、彼に文字通り似ている男)の部分の訳し方である。鷗外はこの同格主語のうち、間に挟まった修飾成分

ihm sprechend ähnlich(er) (彼に文字通り似た)を、本来掛かるべき Knirps(男、輩)に修飾せしめるのではなく、もう一つの同格主語である Sein Sohn Rip を修飾するように変形して、「父にそっくりなリップといふ息子」と訳し、そして残余の ein kleiner ... Knirps(小さな……男)を、端的に「小僧」と訳しつつ、これを訳文においては、主語でなく補語であるように訳した。つまり、底本で「A すなわち……な B は～した」となっている文章を、訳文においては「……な A は～した B です」と訳したのである。従って、本論文第2節で見たような単純な強調構文化でなく、底本における二つの同格主語の内、ひとつを訳文においても主語としつつ、もう一つの方は、その一部(修飾成分)を、前出の主語を修飾するように構造変換し、残る名詞成分を強調構文的な位置に置き換えたのである。

このように複雑な変形作業を行った理由として考えられるのは、底本の動詞成分(verhieß ... zu erben)が、単に「～した」ではなく、「～することを～した」という形になっていることに由来すると考えられる。底本にある動詞表現を不定形に直して示すと「verheißēn + zu + 不定詞」となるが、これは「～することを予告(予告)する」という意味である。したがって底本の表現は、「古い衣装とともに、またその習性をも受け継ぐことが予告されていた」という意味になる。リップの息子はまだ子供であるが、将来、父の着古した服を受け継ぐとともに、父の怠惰な性格をも受け継ぐことが見て取れたということ、父と同じ名を与えられた息子リップは、外見も内面も、見るからに父とそっくりな息子である、という意味である。この部分を、「受け継ぐことが予告されていた」と訳したならば、日本語としてはかなり生硬な文章になる。そこで鴎外は、底本の「父の古い衣装とともに、またその習性をも」に相当する部分を「唯だ貌^{カタチバカリ}計^{ケイ}でなく、心まで」と訳し、そして「受け継ぐことが予告されていた」の部分を「父にそっくりな」の部分に合体させて「父に似やうといふ」という訳文にした。つまり動詞「予告されていた」をそのまま訳出する必要はないと判断し、その内容を、先に出た「似ている」に込めたものと考えられるのである。

(なお鴎外の訳文の内「頼もしい」に相当する部分は底本にはない。すなわちこの「頼もしい」という表現は、鴎外が勝手に追加した部分である。いっさいに鴎外訳「新浦島」には、主人公リップの性格や心情を描写する部分で、訳者鴎外が、訳者としての分限を越えて、しばしば主人公に感情移入するかのような文言を書き込んでおり、この「頼もしい」も、父と同名の息子リップに鴎外が感情移入して、底本のドイツ語にはない文言を書き加えたものと思われる。なお鴎外のこうした追加については、別稿を草して論ずる予定である。)

次に紹介するのは、底本の主語を翻訳でも主語のまま保持しつつ、底本の動詞を邦訳では関係文の中の動詞のように訳し、先行詞的な名詞を訳文において補う、という複雑な技法である。すなわち、鴎外は底本で「A が～した」となっている文章を、翻訳で「A が～する……になる」というふうに、底本の構造を変形しつつ、翻訳では、主語を再説明する名詞を補っているのである。

〔参考〕 Every answer puzzled him, too, by treating of such enormous lapses of time, and of matters which he could not understand: ... (p.46)

〔底本〕 Dazu verwirte ihn jede Antwort, weil sie solch ungeheure Zeiträume und Vorfälle behandelte, aus denen er nicht klug werden konnte: ... (S. 73)

〔鷗外訳〕 それに人の答が一々心を迷はす種になる、幾歳月を経た間の歴史上の出来事を、遠慮會釋もなく、並べて話されるから。(p.182)

主人公リップが二十年の眠りから覚めて村に戻り、村人から二十年間の出来事を一気に聞かされて当惑する、という場面である。

底本の下線部は「それに、どの答えも彼を混乱させた」というほどの意味であるが、verwirren (混乱させる) という動詞を、鷗外は「心を迷はす種」というふうに、関係文のように訳し、底本にはない「種」という表現を付加している。そして文章の最後に「なる」という動詞を付けて和訳した。これにより体言が強調されるとともに、現在形の文体を訳文に持ち込むことが出来る様になったわけである。

全体として、主語を強調する強調構文、という範疇に入れるべきかどうか迷う所であるが、本稿ではいちおう主語を強調する強調構文の変形と見なした。

なお鷗外の訳文の後半に「遠慮會釋もなく、並べて話されるから」という文言があるが、これは底本の aus denen er nicht klug werden konnte (彼には十分理解出来ないところの) をかなり自由に訳したものである。

5 その他の変形技法

前節までに見てきたのは、主語ないし時を表す表現を強調構文のように訳す技法、およびそれを複雑化した訳し方であったが、以下にこうした範疇に入らない技法を紹介する。まず最初は、形容詞と名詞の結びつきを強調構文のように訳す技法であり、底本と翻訳では視点の変更が見られる、というものである。

〔参考〕 On nearer approach, he was still more surprised at the singularity of the stranger's appearance. (p. 39)

〔底本〕 Wie er näher kam, erstaunte er noch mehr über das eigenthümliche Aussehen des Fremden. (S. 65)

〔鷗外訳〕 近くなればなる程、不思議なのは異人の模様です。(p.174)

主人公リップが謎の老人と遭遇する場面である。底本は「近づいてゆくほどに、さらに彼は、その異国人の独特の外観に驚いたのであった」というほどの意味である。鷗外の訳語を借用しつつ、かつ直訳風に底本を訳すと「近くなればなる程、渠は不思議な異人の模様に驚きました」とでもなるところである。実際の鷗外の訳文（後半）と、筆者が便宜的に作成した鷗外風架空直訳文（後半）を比較してみれば、

〔鷗外訳〕 不思議なのは異人の模様 です

〔架空訳〕 渠は 不思議な 異人の模様 に驚きました

という風になり、鷗外が主語と動詞を訳出していないことに気付く。そして残った「形容詞＋名詞」構造である「不思議な異人の模様」の部分を鷗外はパラフレーズして、底本の形容詞を主語的に、そして底本の名詞を補語的に訳している。

鷗外は何故このような事をなしたのか。まず主語も動詞も省略した点であるが、これは前述と同じく、訳文における過去形の羅列を避け、適宜現在形を織り込んで訳文が単調な文体になるのを避ける目的があったと考えられる。

もうひとつ、形容詞と名詞の結びつきを解体してパラフレーズした理由であるが、それは「不思議な異人の模様」という訳文（架空訳）だと、形容詞がどの名詞を修飾するのかが曖昧になりかねない、ということによると思われる。「不思議な」は「異人」を形容するのではなく「模様」を形容するのであるが、「不思議な異人の模様」という訳文だと、それがはっきりしない。仮に「異人の不思議な模様」と訳せば、修飾関係は明確になるが、鴎外はそのような訳文に満足せず、「形容詞＋名詞」という底本の構造を解体して、「主語＋述語」のような構文に訳し変えたのである。

こうした技法を、一般化して述べれば、底本における「Aは……なBを～した」という構造を、鴎外は「……なのはBです」と変形した、ということになる。これは体言を文末に置く、体言重視構文であるが、語順的には底本の語順を尊重している。逆に言えば、底本の語順を尊重したが、その代わりに底本の構造（修飾関係）は変形した、ということになる。

次に紹介するのは、強調構文と言えるかどうか微妙なケースである。むしろ底本の主語を翻訳で主語以外に位置づける技法とも分析しうるものである。場面は、リップがまだ謎の異国人と出会う前で、リップが己の怠惰ぶりを夫人になじられ、かつまた飼い犬もリップ同様に夫人からうとまれている、という様子を描写した箇所である。

〔参考〕 ... for Dame Van Winkle regarded them as companions in idleness, ... (p. 36)

〔底本〕 ... denn Frau van Winkle betrachtete sie als Kameraden im Müßiggang ... (S. 61)

〔鴎外訳〕 何故といふに女房の目から見れば、此犬は亭主の懶惰の友で、……(p. 171)

底本の構文通りに訳すと「ウインクル夫人は彼らのことを怠け者仲間と見なした」ということになる。この短い文章を、鴎外はかなり変形している。これを一般的な形になおすと

〔底本〕 AはBをCと見なした

〔鴎外訳〕 Aから見ればBはCだ

ということになる。つまり底本の目的語を、鴎外は自己の訳において主語に変形している。厳密に言えば、Bにあたるものは、底本ではsie（彼ら）であり、リップと飼い犬ヴォルフの両者を指す。他方、鴎外訳でBに相当するのは「此犬」であり、リップは含まれない。したがって、同じくBと形式化して表現したが、Bの指し示す内容に微妙な差があることは指摘しておかねばならない。本論文の上記箇所では、文の構造に焦点を当てているため、こうした差異は当面捨象して論を進めることとする。

このことを踏まえた上で鴎外の訳文に見られる特質を見てゆくと、次のようなことが指摘しうる。すなわち鴎外は、ドイツ語の冒頭にある Frau van Winkle betrachtete（ウインクル夫人は〔～を～と〕見なした）という「主語＋動詞」の構文を「女房の目から見れば」と、状況を説明する文章として訳し、続く sie（彼ら）を変形して「此犬は」と、あえて焦点を飼い犬のヴォルフにのみ当てつつ、かつ、その語を主語に変えて訳した。底本で sie（彼ら）は、もちろん betrachtete（見なした）の主語でなく、目的語である。そして底本の最後の部分（上記のCに相当する部分）である als Kameraden im Müßiggang（なまけた行為の仲間として）を「亭主の懶惰の友」と、あえて「亭主の」という説明語句を付けて訳した。これはもちろん、底本でBにあたる sie（彼ら）及びCにあたる Kameraden（仲間）が、両方共にリップおよび飼い犬を指すのに対し、鴎外がBを「此犬」としたことに伴い、底本で文法的にBと同格のC

も、自己の訳文において、「リップの怠け仲間」であるという位置づけにする必要が生じ、そこで訳文において「亭主の」という語句を付加したわけである。

こうした構造の違いとは別の観点から見ると、鷗外訳が、底本の語順を生かした訳となっていることが分かる。つまり主語や動詞といった文法的構造は底本と鷗外訳では大きく異なっているが、名詞や代名詞（上記のA～C）に関する限り、鷗外訳は底本の語順をうまく生かしている。

こうして、鷗外は自己の訳文において、底本の文法構造は大いに變形しつつ、語彙の配列としては底本の語順を活用するという手法を用いたわけであるが、その結果、底本で過去形となっている文章を、過去形を使用しない訳文とした。

最後に分析するのは、底本における主文と副文の関係を、翻訳で逆転させ、かつ体言重視構文に變形するという、非常に複雑な技法を見せている例である。リップが二十年の眠りから覚めて、山から村に戻ってみると、道行く人の顔も形も、そして近所の犬も、みな知らないもの^{トホリス}に変わっていた、という場面である。

〔参考〕 The dogs, too, not one of which he recognised for an old acquaintance, barked at him as he passed.
(p. 43)

〔底本〕 Auch die Hunde, von denen er nicht einen einzigen als alten Bekannten wieder erkannte, bellten ihn an, wie er vorbei ging. (S. 69f.)

〔鷗外訳〕 犬の居る前を通過^{トホリス}ぎる度毎に吠えられるから、氣をつけて見れば、皆な識らない顔の犬仲間です。(p. 178)

底本においては die Hunde (犬) が主語で bellten ihn an (彼に吠え掛かった) が動詞と目的語、という構造になっている。そして底本では主語 die Hunde を先行詞として関係文(von denen er ... erkannte)が修飾している。いささか学校文法的な説明になるが、「犬が彼に吠え掛かった」という主文に、「彼が、その中のどれ一匹として、昔からの馴染みとして認識しなかった(ところの)」という関係文(副文)が従属するという構造になっている。つまり底本は「主文+副文」の構造になっており、主文では「犬」が「吠えかかった」ということを主題としている。

ところが鷗外の訳文では、主文と副文の関係が逆転している。つまり鷗外訳では、底本の副文で述べられていた内容(彼はその中のどれ一匹として……認識しなかった)が主題化され「……氣をつけて見れば、皆な識らない顔の犬仲間です」となり、逆に、底本の主文の内容(犬が彼に吠え掛かった)は、鷗外訳では「吠えられるから」という具合に、リップが「氣をつけて見」る理由(契機)を表すものとして、副次的な位置に置かれている。

こうした構造を、形式化して示すと次のようになろう。

底本(主文) 犬が彼に吠えかかった

底本(副文) 彼はその犬を識らなかったところの(犬)

鷗外(副文) (犬に) 吠えかかれるので、(それを見れば)

鷗外(主文) (それは) (彼が) 識らない犬である。

こうして鷗外は底本における主文と副文の関係を逆転せしめ、底本の副文の内容を、自己の訳文にお

いて主題化したわけである。

こうして鷗外は、底本で「犬が彼に吠え掛かった」が主題となっている文を、「彼が識らない犬である」を主題にするものに変更したわけであるが、それにともない、強調構文(体言重視構文)も、リップを主体に変更して「皆な識らない顔の犬仲間です」とした。もしも底本の主題のままに、かつ強調構文風に訳を作成したら、「吠え掛かったのは犬です」という訳が考えられたところである。

本節で検討した最後の例は、強調構文の採用と、主題の変更(視点の変更)の両方を訳文に反映しながら、鷗外が過去形の羅列を避けた、非常に複雑な翻訳技法であると言えよう。

6 小括

本研究プロジェクト前号で考察したように、鷗外は「新浦島」において、底本のドイツ語の語順を邦訳に生かす技法を見せていた。この技法により、底本における描写(発想)の流れと同じ様な流れが邦訳においても維持される、という効果が得られた。一方本号で考察したのは、底本では強調構文になっていない文章を、邦訳では強調構文風に訳すという技法であって、これは底本の描写(発想)の流れと敢えて異なる流れを邦訳に持ち込んだものと言える。

このように対照的な翻訳技法を、同じ「新浦島」の中に持ち込んだのは、訳文が単調になるのを避けるためであると考えられる。物語の文章である以上、底本の動詞はほとんど過去形であるが、邦訳においても過去形ばかりを使用した場合、「～した」という語調の文章が延々と続くこととなり、日本語の文章としては、多少とも味わいに乏しくなるきらいがある。現代の翻訳者でも、たとえば「～した」という邦訳文の羅列を避けるため、たとえば「～したのである」という訳文を採用する等、単調さを避けるための工夫をすることがあるが、鷗外の場合は、それを強調構文の採用という形で行ったものと考えられるのである。